

模擬授業では中原中也の恋愛詩『時こそ今は……』を読みました。この作品はボードレール『夕べの諧調』のオマージュともいえるべき作品で、典拠を慎重に自分の詩に歌い替えていく中也の確かな技術が浮かび上がってきました。こうした引用の方法は中原中也だけでなく多くの近代作家にみられるものですが、今回は中原中也と同時代に活躍した立原道造という詩人を取り上げてみましょう。

立原道造は1914〔大正3〕年、東京日本橋に生まれました。中原中也は1907〔明治40〕年生まれですから7つ年下です。立原は1934〔昭和9〕年4月に東大建築学科に入学、一方で堀辰雄や室生犀星といった文学者に師事し、堀辰雄が創刊した第2次『四季』の編集同人となります。大学卒業後には大手の建築事務所に勤務するも秋に肋膜炎と診断され、健康がすぐれないまま1939〔昭和14〕年3月29日に永眠しました。24歳でした。中也はこの一年半前、1937〔昭和12〕年10月22日に30歳で亡くなっています。

立原の詩の多くには恋愛が歌われていますが、ここでは『或る不思議なよろこびに』を読んでみましょう。『四季』の1936〔昭和11〕年6月号に掲載された作品です。まずはどんな内容かをつかんでください。

或る不思議なよろこびに 立原道造

戸の外の、寒い朝らしい気配を感じながら
私はおまへのやさしさを思ひ……
——中原中也の詩から

灼けた瞳が 灼けてゐた
青い眸ひとみでも 茶色の瞳でも
なかつた きらきらしては
僕の心を つきさした。

泣かさうとでもいふやうに
しかし 泣かしはしなかつた
きらきら 僕を撫なでてゐた
甘つたれた僕の心を嘗めてゐた。

灼けた瞳は 動かなかつた
青い眸ひとみでも 茶色の瞳でも
あるかのやうに いつまでも

灼けた瞳が 叫んでゐた！
太陽や海藻のことなど忘れてしまひ
僕の心に穴あけて 灼けた瞳が 燻くすぶつてゐた

「僕」がだれかと見つめあっている場面のようなようです。その人の瞳がきらきらして「僕」の心を突きさすようだった、ということですが、最後の行に「僕の心に穴あけて 灼けた瞳が 燻くすぶつてゐた」とあるように、その瞳の力が大変に強く僕の心を灼け焦くすぶがす程くすぶに燻くすぶっていたというのです。恋の相手は大変情熱的であるようです。

詩の内容としては難しい所はありません。ただここでタイトル脇に挙げられている語句に注目してみましょう。「中原中也の詩から」とあります。本作が掲載された『四季』を探してみると、実は性質が大変似通っている中原中也の作品が見つかるのです。

立原『或る不思議なよろこびに』は『四季』1936〔昭和11〕年6月号の発表でしたが、その半年前の1935〔昭和10〕年12月号に中也が『青い瞳』という作品を発表していました。

青い瞳 中原中也

かなしい心に夜が明けた、
うれしい心に夜が明けた、
いいや、これはどうしたといふのだ？
さてもかなしい夜の明けだ！

青い瞳は動かなかつた、
世界はまだみんな眠つてゐた、
さうしてその『時』は過ぎつつあつた、
あゝ、遠い遠い話。

青い瞳は動かなかつた、
——いまは動いてゐるかもしれない……
青い瞳は動かなかつた。
いたいたしくて、美しかった！

私はいまは茲ここにいる、黄色い灯影に。
あれからどうなつたか知らない……
あゝ、あの朝はあゝして過ぎつつあつた
碧あをい、噴き出す蒸気のやうに……

場面は青い瞳の人がじっと「私」を見つめていた遠いいつかの夜明けです。「いたいたしくて、美しかった！」そんな「青い瞳」ですが、これが立原『或る不思議なよろこびに』で第1連2行目、第3連2行目にリサイクルされていることにお気づきでしょう。それに二人が見つめあっているというのは大変似た状況でもあります。

述べたように『或る不思議なよろこびに』は中也『青い瞳』の半年後の発表でした。これはどういうことか。パクリ？ 当時の『四季』の読者もそう感じたに違いありません。タイトル脇の文句から中原中也の作品を思い出し、『四季』のバックナンバーを引っ張り出して確認してみると、中也『青い瞳』と趣向が酷似していることに気づきます。やはりパクリなのか？ でもそれならなぜ立原はわざわざ中也の名前を出しているのだろうか？

ここで中也『青い瞳』を踏まえた上で『或る不思議なよろこびに』を読み直してみるとどうでしょう。第1連には「灼けた瞳」が「青い眸ひとみでも 茶色の眸ひとみでも／なかつた」とありました。ここで「青い眸ひとみ」は「灼けた瞳」との対比で提示されていますね。第3連でも「灼けた瞳は 動かなかつた／青い眸ひとみでも 茶色の瞳ひとみでも／あるかのやうに いつまでも」と、やはり「青い眸ひとみ」は「灼けた瞳」との比較に用いられています。つまり立原は「青い眸ひとみ」の人を思い出しつつ「灼けた瞳」の人に対峙しているということなのです。ここで読者は、なるほど立原『或る不思議なよろこびに』とは中也『青い瞳』へのアンサーソングなのだと気づくこととなります。

『或る不思議なよろこびに』は一読した時点では、情熱的な相手に見つめられているという作品でした。ですが彼はタイトル脇に中也の名前を付し、先行する中也『青い瞳』の世界を読者に想起させて今の恋が始まる以前の状態が重ね合わされるように誘導するのです。この手続きによりかつての別れが悲しかった分、今の恋が熱く燃えあがろうとしているという対比関係が生まれます。青い瞳の人とは別れてしまったが今は灼けるような情熱を持った瞳の人に見つめられている、そんな「或る不思議なよろこび」。

以上のように作品の周辺を調べることで、特に元ネタとの比較をすることで読解は豊かになっていきます。先行する作品や外国文学、古典などを作り直し自作に取り込む近代の作家は意外なほどに多いのです。森鷗外も芥川龍之介も太宰治も、そして今回は取られる側だった中原中也も。作家が典拠を作り直した手つきを分析することで思いもかけない読解が浮上してくる、そんな発見が近代文学研究の大きな魅力の一つです。